

# 1次元定常輸送方程式の正則性解析

川越 大輔\*

京都大学大学院情報学研究科, 2015年2月

## 1 問題設定

$\Omega$  を开区間  $(0, 1)$ ,  $S^1$  を単位円とし, 次の微分積分方程式を考える:

$$-\sin\theta \frac{\partial}{\partial x} I(x, \xi) - (\mu_a + \mu_s) I(x, \xi) + \mu_s \int_{S^1} p(\xi, \xi') I(x, \xi') d\sigma_{\xi'} = 0, \quad (x, \xi) \in \Omega \times S^1. \quad (1)$$

ただし,  $\theta$  は  $\xi = (\cos\theta, \sin\theta)$  を満たす  $(-\pi, \pi]$  の元であり, 以下この関係により  $S^1$  と  $(-\pi, \pi]$  を同一視する. また,  $d\sigma$  は  $S^1$  上の線素とする. ここで,  $\mu_a$  および  $\mu_s$  は非負の定数,  $p$  は  $S^1 \times S^1$  上の連続関数であることを仮定する. 本稿では, 方程式 (1) を1次元定常輸送方程式と呼ぶ.

定常輸送方程式 (1) には, 通常次の境界条件が課される:

$$I(x, \xi) = I_0(x, \xi), \quad (x, \xi) \in \Gamma_-. \quad (2)$$

ただし,

$$\Gamma_- := \{(0, \xi) | 0 < \theta < \pi\} \cup \{(1, \xi) | -\pi < \theta < 0\}$$

とする.

最後に, 定常輸送方程式の境界値問題の解を次のように定義する. ただし,  $C_b((\Omega \times S^1) \cup \Gamma_-)$  は  $(\Omega \times S^1) \cup \Gamma_-$  上の有界連続関数全体からなるベクトル空間とし,

$$\|I\|_\infty := \sup_{(x, \xi) \in (\Omega \times S^1) \cup \Gamma_-} |I(x, \xi)|$$

で定義されるノルム  $\|\cdot\|_\infty$  により Banach 空間となる.

**定義 1**  $I \in C_b((\Omega \times S^1) \cup \Gamma_-)$  が次の積分方程式を満たすとき,  $I$  は定常輸送方程式の境界値問題 (1)-(2) の解であるという.

$x \in [0, 1), \theta \in (0, \pi)$  のとき,

$$I(x, \xi) = \exp\left(-\frac{\mu_a + \mu_s}{\sin\theta} x\right) I_0(0, \xi) + \frac{\mu_s}{\sin\theta} \int_0^x \exp\left(-\frac{\mu_a + \mu_s}{\sin\theta} (x-t)\right) \int_{S^1} p(\xi, \xi') I(t, \xi') d\sigma_{\xi'} dt. \quad (3)$$

$x \in (0, 1], \theta \in (-\pi, 0)$  のとき,

$$I(x, \xi) = \exp\left(\frac{\mu_a + \mu_s}{\sin\theta} (1-x)\right) I_0(1, \xi) - \frac{\mu_s}{\sin\theta} \int_x^1 \exp\left(\frac{\mu_a + \mu_s}{\sin\theta} (t-x)\right) \int_{S^1} p(\xi, \xi') I(t, \xi') d\sigma_{\xi'} dt. \quad (4)$$

本稿では, この境界値問題の存在と一意性, さらに境界値の滑らかさと解の滑らかさとの関係について述べる.

\*d.kawagoe@acs.i.kyoto-u.ac.jp

## 2 主結果

**定理 1**  $I_0 \in C_b(\Gamma_-)$  かつ  $\mu_a > 0$  と仮定する. このとき, 境界値問題 (1) - (2) はただ 1 つの解  $I$  をもつ.

**定理 2** 定理 1 と同じ仮定するとき,  $\frac{\partial I}{\partial x}$  が存在して  $C(\Omega \times S^1)$  に属する. さらに, 解  $I$  は  $\Omega \times S^1$  において  $x$  について無限回微分可能である.

**定理 3** 定理 1 の仮定に加えて,  $p$  が  $C^1$  級でかつ  $\frac{\partial I_0}{\partial \theta}$  が  $C_b(\Gamma_-)$  に属すると仮定する. このとき,  $\frac{\partial I}{\partial \theta}$  が存在して  $C(\Omega \times S^1)$  に属する.

## 3 定理 1 の証明

まずは一意性を示す.  $I_1, I_2$  を解とし, その差を  $I$  とおく. すなわち,  $I := I_1 - I_2$ . このとき, 解の定義から  $I$  は  $C_b((\Omega \times S^1) \cup \Gamma_-)$  に属し, 次の積分方程式を満たすことが分かる:

$x \in [0, 1], \theta \in (0, \pi)$  のとき,

$$I(x, \xi) = \frac{\mu_s}{\sin \theta} \int_0^x \exp\left(-\frac{\mu_a + \mu_s}{\sin \theta}(x-t)\right) \int_{S^1} p(\xi, \xi') I(t, \xi') d\sigma_{\xi'} dt. \quad (5)$$

$x \in (0, 1], \theta \in (-\pi, 0)$  のとき,

$$I(x, \xi) = -\frac{\mu_s}{\sin \theta} \int_x^1 \exp\left(\frac{\mu_a + \mu_s}{\sin \theta}(t-x)\right) \int_{S^1} p(\xi, \xi') I(t, \xi') d\sigma_{\xi'} dt. \quad (6)$$

(5), (6) を評価することで, 不等式  $\|I\|_{\infty} \leq \frac{\mu_s}{\mu_a + \mu_s} \|I\|_{\infty}$  を得る. この不等式からただちに,  $I = 0$  すなわち  $I_1 = I_2$  がしたがう.

次に, 解の存在を構成によって示す. 関数列  $\{I^{(n)}\}_{n \geq 0}$  を次のように帰納的に定義する.  $I^{(0)}$  を

- $x \in [0, 1], \theta \in (0, \pi)$  のとき,  $I^{(0)}(x, \xi) := \exp\left(-\frac{\mu_a + \mu_s}{\sin \theta}x\right) I_0(0, \xi)$ .
- $x \in (0, 1], \theta \in (-\pi, 0)$  のとき,  $I^{(0)}(x, \xi) := \exp\left(\frac{\mu_a + \mu_s}{\sin \theta}(1-x)\right) I_0(1, \xi)$ .
- $x \in (0, 1), \theta \in \{0, \pi\}$  のとき,  $I^{(0)}(x, \xi) := 0$ .

で定義する.  $I^{(n)}$  まで定義できたとして,  $I^{(n+1)}$  を

- $x \in [0, 1], \theta \in (0, \pi)$  のとき,

$$I^{(n+1)}(x, \xi) := \frac{\mu_s}{\sin \theta} \int_0^x \exp\left(-\frac{\mu_a + \mu_s}{\sin \theta}(x-t)\right) \int_{S^1} p(\xi, \xi') I^{(n)}(t, \xi') d\sigma_{\xi'} dt.$$

- $x \in (0, 1], \theta \in (-\pi, 0)$  のとき,

$$I^{(n+1)}(x, \xi) := -\frac{\mu_s}{\sin \theta} \int_x^1 \exp\left(\frac{\mu_a + \mu_s}{\sin \theta}(t-x)\right) \int_{S^1} p(\xi, \xi') I^{(n)}(t, \xi') d\sigma_{\xi'} dt.$$

- $x \in (0, 1), \theta \in \{0, \pi\}$  のとき,

$$I^{(n+1)}(x, \xi) := \frac{\mu_s}{\mu_a + \mu_s} \int_{S^1} p(\xi, \xi') I^{(n)}(x, \xi') d\sigma_{\xi'}.$$

で定義する. このとき, 次の2つが簡単な計算により分かる.

**補題 1**  $I^{(n)} \in C_b((\Omega \times S^1) \cup \Gamma_-)$  と仮定する. このとき, 次の評価が成り立つ.

$$\|I^{(n+1)}\|_\infty \leq \frac{\mu_s}{\mu_a + \mu_s} \|I^{(n)}\|_\infty.$$

**命題 1**  $I_0 \in C_b(\Gamma_-)$  ならば, すべての  $n \geq 0$  に対して,  $I^{(n)} \in C_b((\Omega \times S^1) \cup \Gamma_-)$  が成り立つ.

補題 1 と命題 1 から,  $I(x, \xi) := \sum_{n=0}^{\infty} I^{(n)}(x, \xi)$  が  $(\Omega \times S^1) \cup \Gamma_-$  上絶対一様収束し,  $C_b((\Omega \times S^1) \cup \Gamma_-)$  に属することが分かる. また, この  $I(x, \xi)$  が解となっていることも級数の計算により確認できる. 以上より, 解の存在が示された.

## 4 定理 2 の証明

証明の概略を述べる前に, 次の2つに言及しておく. 1つ目は, 定常輸送方程式 (1) の形から,  $I(x, \xi)$  が  $\theta \notin \{0, \pi\}$  のとき  $x$  について連続的微分可能であることは自明である, ということである. したがって,  $\theta \in \{0, \pi\}$  の場合について微分可能性を議論することになる. ところが, 元の方程式からこの場合の微分可能性を議論することができない. そのため, 前節で得られた級数解を項別微分し, その級数の収束を確認することを本節の目標とする. 2つ目の言及点は, 1階導関数は一般に非有界になることが知られている, ということである [A]. この事情から, 先ほどと同様の一樣収束評価をただちに用いることができない. そこで, 本稿では開区間  $(0, 1)$  の内部にコンパクト集合  $K$  をとり,  $K \times S^1$  上での導関数の一樣収束を示す. 以上の点をふまえて, 本節では次の2つの命題を示す.

**命題 2**  $K$  を  $\Omega$  のコンパクト部分集合とする. このとき, 任意の  $n \geq 0$  に対して,  $\frac{\partial I^{(n)}}{\partial x}$  は  $K \times S^1$  上連続 (したがって有界) である.

**命題 3**  $\sum_{n=0}^{\infty} \frac{\partial I^{(n)}}{\partial x}(x, \xi)$  は  $K \times S^1$  上絶対一様収束する.

ここで,  $K$  として閉区間  $[\delta, 1 - \delta]$ ,  $0 < \delta < 1/2$  のみを考える. この場合のみ議論すれば十分である. このようにとった  $K$  に対して,

$$\sum_{n=0}^{\infty} \delta_n = \delta$$

を満たす正数列  $\{\delta_n\}_{n \geq 0}$  をとる. さらに,  $\{\delta_n\}_{n \geq 0}$  に対応する閉区間の列  $\{K_n\}_{n \geq 0}$  を

$$K_n := \left[ \sum_{m=0}^n \delta_m, 1 - \sum_{m=0}^n \delta_m \right]$$

で定義する.  $K \times S^1, K_n \times S^1$  上の連続関数の最大値ノルムをそれぞれ  $\|\cdot\|_K, \|\cdot\|_n$  で表すことにする. このとき, 次の補題が成立する.

**補題 2**  $\frac{\partial I^{(n)}}{\partial x}$  が  $K_n \times S^1$  上連続ならば,  $\frac{\partial I^{(n+1)}}{\partial x}$  は  $K_{n+1} \times S^1$  上連続でかつ次の不等式を満たす.

$$\left\| \frac{\partial I^{(n+1)}}{\partial x} \right\|_{n+1} \leq \frac{2\mu_s}{e\delta_{n+1}(\mu_a + \mu_s)} \|I^{(n)}\|_\infty + \frac{\mu_s}{\mu_a + \mu_s} \left\| \frac{\partial I^{(n)}}{\partial x} \right\|_n.$$

定義より任意の  $n \geq 0$  に対して  $K \subset K_n$  が成り立つから, 補題 2 から命題 2 が成立することが分かる. また, 特に  $\tilde{\mu}_a := \frac{\mu_a}{2}$ ,  $\delta_0 := \frac{\tilde{\mu}_a}{\tilde{\mu}_a + \mu_s} \delta$ ,  $\delta_{n+1} := \frac{\mu_s}{\tilde{\mu}_a + \mu_s} \delta_n$  ととれば, 次の評価が成り立つことが分かる.

$$\left\| \frac{\partial I}{\partial x} \right\|_K \leq \sum_{n=0}^{\infty} \left\| \frac{\partial I^{(n)}}{\partial x} \right\|_n \leq \left\| \frac{\partial I^{(0)}}{\partial x} \right\|_0 \sum_{n=0}^{\infty} \left( \frac{\mu_s}{\mu_a + \mu_s} \right)^n + \frac{2\|I_0\|_{\Gamma_-}}{e\delta_0} \sum_{n=0}^{\infty} n \left( \frac{\tilde{\mu}_a + \mu_s}{\mu_a + \mu_s} \right)^n.$$

ただし,  $\|\cdot\|_{\Gamma_-}$  は  $\Gamma_-$  上の最大値ノルムを表す. 右辺は有限確定するから, 命題 3 が示された.

一般の  $m$  階導関数については, 次が成り立つ.

**補題 3** 任意の  $m, n \geq 0$  に対して,  $\frac{\partial^m I^{(n)}}{\partial x^m}$  が  $K_n \times S^1$  上連続ならば,  $\frac{\partial^m I^{(n+1)}}{\partial x^m}$  は  $K_{n+1} \times S^1$  上連続でかつ次の不等式を満たす.

$$\begin{aligned} \left\| \frac{\partial^m I^{(n+1)}}{\partial x^m} \right\|_{n+1} &\leq \frac{\mu_s}{\mu_a + \mu_s} \left\| \frac{\partial^m I^{(n)}}{\partial x^m} \right\|_n \\ &\quad + \frac{\mu_s}{\mu_a + \mu_s} \sum_{k=1}^{m-1} \left( \frac{m-k}{e\delta_{n+1}} \right)^{m-k} \left\| \frac{\partial^k I^{(n)}}{\partial x^k} \right\|_n \\ &\quad + \frac{2\mu_s}{e(\mu_a + \mu_s)} \left( \frac{m}{e\delta_{n+1}} \right)^m \|I^{(n)}\|_\infty. \end{aligned}$$

$\{\delta_n\}_{n \geq 0}$  として,  $\delta_0 = \delta_0^{(m)} := \left( 1 - \left( \frac{\mu_s}{\tilde{\mu}_a + \mu_s} \right)^{\frac{1}{m}} \right) \delta$ ,  $\delta_{n+1} = \delta_{n+1}^{(m)} := \left( \frac{\mu_s}{\tilde{\mu}_a + \mu_s} \right)^{\frac{1}{m}} \delta_n^{(m)}$  をと

れば, 級数  $\sum_{n=0}^{\infty} \frac{\partial^m I^{(n)}}{\partial x^m}$  が  $K \times S^1$  上絶対一様収束することを示すことができる.

## 5 定理 3 の証明

定理 3 の証明の方針は, 定理 2 と同様である. ただし,  $x$  方向の微分可能性とは異なり,  $\theta \in \{0, \pi\}$  の場合の  $\theta$  方向微分可能性は少し複雑な計算を要する.

**命題 4**  $x \in (0, 1), \theta \in \{0, \pi\}$  のとき,

$$\begin{aligned} \frac{\partial I^{(0)}}{\partial \theta}(x, \xi) &= 0, \\ \frac{\partial I^{(n+1)}}{\partial \theta}(x, \xi) &= \frac{\mu_s}{\mu_a + \mu_s} \int_{S^1} \frac{\partial p}{\partial \theta}(\xi, \xi') I^{(n)}(x, \xi') d\sigma_{\xi'} \\ &\quad - \frac{\mu_s}{(\mu_a + \mu_s)^2} \int_{S^1} p(\xi, \xi') \frac{\partial I^{(n)}}{\partial x}(x, \xi') d\sigma_{\xi'}. \end{aligned}$$

補題 2 に対応して,  $\theta$  偏導関数に対して次の補題が成り立つ.

補題 4  $\frac{\partial I^{(n)}}{\partial x}$  が  $K_n \times S^1$  上連続ならば,  $\frac{\partial I^{(n+1)}}{\partial \theta}$  は  $K_{n+1} \times S^1$  上連続でかつ次の不等式を満たす.

$$\begin{aligned} \left\| \frac{\partial I^{(n+1)}}{\partial \theta} \right\|_{n+1} &\leq C \frac{\mu_s}{(\mu_a + \mu_s)^2 \delta_{n+1}} \|I^{(n)}\|_\infty + \frac{\mu_s}{(\mu_a + \mu_s)^2} \left\| \frac{\partial I^{(n)}}{\partial x} \right\|_n \\ &\quad + \frac{2\pi\mu_s}{\mu_a + \mu_s} \left\| \frac{\partial p}{\partial \theta} \right\|_\infty \|I^{(n)}\|_\infty. \end{aligned}$$

ただし,  $C > 0$  は  $n$  と  $\delta$  によらない定数.

補題 4 から次の評価が成り立つことが分かる.

$$\begin{aligned} \sum_{n=0}^{\infty} \left\| \frac{\partial I^{(n)}}{\partial \theta} \right\|_K &\leq \sum_{n=0}^{\infty} \left\| \frac{\partial I^{(n)}}{\partial \theta} \right\|_n \\ &\leq \left\| \frac{\partial I^{(0)}}{\partial \theta} \right\|_0 + \frac{2\pi\mu_s}{\mu_a + \mu_s} \left\| \frac{\partial p}{\partial \theta} \right\|_\infty \sum_{n=0}^{\infty} \|I^{(n)}\|_\infty \\ &\quad + C \frac{\mu_s}{(\mu_a + \mu_s)^2 e} \sum_{n=0}^{\infty} \frac{1}{\delta_{n+1}} \|I^{(n)}\|_\infty + \frac{\mu_s}{(\mu_a + \mu_s)^2} \sum_{n=0}^{\infty} \left\| \frac{\partial I^{(n)}}{\partial x} \right\|_n. \end{aligned}$$

$\{\delta_n\}_{n \geq 0} = \{\delta_n^{(1)}\}_{n \geq 0}$  ととれば, 右辺が有限確定し, 級数  $\sum_{n=0}^{\infty} \frac{\partial I^{(n)}}{\partial \theta}$  が  $K \times S^1$  上絶対一様収束することが分かる.

## 参考文献

- [A] D. S. Anikonov, A. E. Kovtanyuk, and I. V. Prokhorov, *Transport Equation and Tomography*, VSP, The Netherlands, (2002).